

選評

審査員 洲 浜 昌 三

有 原 一三五

川 辺 真

【一般の部】

総 評

最初に、どのように選考したのか概要を書いておきます。十月初旬に、名前を伏せてコピーした応募作品一八篇が届きました。各審査員は作品を読んで意中の作品をピックアップし、十月二十日の選考会議に臨みました。全般的な傾向や感想を出し合ったあと、それぞれが約十編の入選候補作品をあげました。三人が一致した作品が五篇、二人が一致した作品六編、一人が二編。候補にあがった作品を一編一編検討して感想を出し議論したあと、投票しました。三人が一致した作品が四編あり、その中から更に議論して、上位入選作品を決めていきました。議論するなかで、見落とされていた作品の良さが浮上したり、類型的発想や不的確な表現などが指摘され評価が下がる場合もありましたが、最終的には一致して入選作品を決めました。

現代詩としてインパクトのある作品には出会いませんでしたが、それぞれの作品に、「捨てがたい持ち味」や「風雪を経た人生の目」があり、詩でなければ表現できない文学性がありました。詩には、「こう書くべきである」という決まりはありません。一番自由な表現形式です。小説に近い「散文詩」もありますし、俳句に近いシンボリックな短詩もあります。しかし、普通のことを普通の言葉で書いても詩になりません。独自性、オリジナリティ、個性、発見、独自の視点などは必要ですし、説明ではなく（説明は芸術の敵）、省略（書かないこと）が詩を起立させます。省略や空白があるから、読者は独自に想像の翼を広げるのです。想像、イメージーションの豊かさこそ、文学のエッセンスだと思います。

知事賞 「汚れ」

角森 玲子

やさしい言葉で淡々と書かれた詩ですが、深味があり、様々なことを考えさせられます。十八行の短い詩に、九回「からだをあらう」という言葉がでてきます。波のように人生の繰り返しを思わせます。繰り返し強調が効いています。体の汚れは、洗ったら落ちるでしょう。しかし、「いいすぎたこと」「できなかつたこと」「子どもをふたり 亡くしたこと」それはいくら洗っても消えない。読者はそれぞれの身に引き寄せて、自分の人生や宿業に思いを馳せます。いい詩です。

金賞 「御前」

金築 雨学

説明的な言葉は皆無。三連までは名詞を並列して置くだけ。「なんだこれは？素っ気ない」と思わせ、ラストで一気の意味を帯び、現実がリアルに浮かび上がってきます。言葉が持つ効用と魔術性、文学性を十分心得ている人でないと書けない詩です。名詞以外の言葉があるのは最後の連だけです。この言葉の背後に、この詩の深い闇と恐ろしさが潜んでいます。ベッドに入る前に、数多い「沖の漁り火」の数をかぞえ、三連までに書いた「一日の朝餉、昼餉、夕餉」の名前を声に出して言うてから、寝るのです。できますか。そうしないと認知症という暗黒の世界が広がっていくのです。

銀賞 「学校」

牧尾 実

難しい言葉や詩を意識した抽象的な表現はまったくありません。力まず、淡々と情景が描写され、水彩画を見ているように一つの風景が浮かんできます。家の近くに学校があり、そこに父が勤務し、子どもたちも遊んでいた。この「山に囲まれた空が遠い場所」が幼い時の「すべてだった」。学校はなくなり階段だけが残る。その階段の下で、「学校へ通える日を夢見ている」幼い作者がいる。一昔前の懐かしい一幅の風景で味わいが残りますが、単なる思い出の域に留まっている弱さもあります。題も「学校」より「石段」か「階段」にしてイメージの焦点を絞った方が効果的かもしれません。

銀賞 「優しい夫婦」

柳楽 多恵子

目の前に、明るさが見えてくる心温まる詩です。五時間も過ぎた夫の手術が終わるのを待ちながら、目の前の「優しい夫婦」の会話を目にします。「私」と「夫」との関係は直接書かれていません。ただ「ずっと私の胸に降り積もった雪」と、象徴的に表現されているだけです。でも空想は広がります。長い間つらいことがあったのでしょうか。この詩句がこの詩に奥行きを与えています。題は、ひと工夫したい。最後の一行も一考したい気がします。

銅賞 「わが最後の田肥をまく」 小林 俊二

土から生まれたような独特で個性的な詩です。田に対する深い思いと、時代への遺恨が、詠じるような口調で書かれ、凝縮したエネルギーがあります。先祖代々幾百年続いた田に「最後の肥をまく」。そこへ争点を絞って書かれたのが詩の効果を高めたといえるでしょう。文語の混在、文末の助詞の扱い、詩全体の形式などの点で不統一や未整理などところがあり、詩の完成度という点からひと工夫欲しいところです。

銅賞 「愛をありがとう」 横木 早苗

ひと捻りもせず、素直に気持ちを書き下ろした詩です。それだけに気持ちはそのまま伝わってきますが、物足りない感じも残ります。目ではなく朗読で聞くと、この素直な感謝の気持ちが胸を打つかも知れません。詩の風景が覗いて見えるところは、「あなたの建てたこの家が夢や希望の出発点で、今は私一人の住み家になりました」という箇所です。無意識の半捻りがあり、哀感を伴う物語性がイメージとして広がっていきます。

銅賞 「桜」 凜子

余計な言葉を切り落として切り詰めて書かれ、詩に一定の語調やリズムがあり、心地よい響きや流れがあります。詩句も作者の美的な語感から選ばれて洗練されているので美しい桜の姿が見えてきます。同時に、それは読者の心の表面を撫でて過ぎ去っていくかもしれません。食い込んでくる陰影や独自性がないからです。普通の日本人が抱いている桜のイメージを超える視点が見えないからです。最後の「儂くもあれ」にちよつと違和感を感じました。

入 選 「ルーズリーフ」 幸村 蒼依

ルーズリーフに自分を置き換えて、その思いを素直に伸び伸びと書いています。作者独自の視点や新たな発見や詩特有の象徴的表現などはありませんが、「使い捨て」でも「みんなの役に立っている」という素朴な気持ちを人間に置き換えて読むこともできます。純粋な目を生かして、これからも書いてほしいという激励の意味も込めて選びました。

入 選 「手術その後」 佐田 光子

記録メモのように淡々と綴られています。リハビリを命じられていながら、膝の痛みにも耐えても畑仕事をしてしまう気丈さや医者への信頼が温かく伝わってきます。全般に平板な書き方で不要な言葉も散見されます。「うす茶色のにごり水を／何斗抜いてもらったか」という含蓄のある重い詩句を核にしたら、作者独自の詩が生まれたかも知れません。

以下の作品もそれぞれ良さがああり、入賞対象として議論しました。「味噌汁さん、さようなら」ユーモラスな物語で面白いのですが、散文的で推敲が足りません。「花」詩の技巧もありよくできた作品という点では一致しましたが、「ササユリ」自体の認識に基本的な誤解を指摘されました。「背中の母」凝縮した詩句や時代意識に鋭いものがありました。スローガンの硬直性が良さを減じたことが惜しまれます。以上三人の批評や意見をまとめました。(文責 洲浜)

【ジュニアの部】

総評

小中学生対象の「ジュニア」の部が設けられたのは平成十九年、今年で八年目になります。文芸に若い人たちの参加がほとんどなく、「島根文芸」でも高齢者中心になっている現状から、未来の文芸愛好者を育てるために、希望と励ましを与える発表の場をつくることが目的でした。ゼロや二編という年もあり、多い時には八四編、七十七編という年もありました。今年は二十七編でした。小中学生の場合、自分から応募することはほとんど考えられません。学校の授業や地域の指導者の熱意によって成り立っています。今回も、鏡のように純白な心で写し、素直な目で見て書いたすばらしい詩が集まりました。優劣を越えて、書くこと自体に大きな意味があると信じています。今後ともご協力をお願い致します。

大賞 「雨」

坂本 宙

出来事を、普通の文章で日記のように書いた詩が多いなかで、この作品には、事実をリアルにしっかり見て表現する力と同時に、詩的な比喻や飛躍があり、詩を豊かにしています。「雨のあちゃんたち」「かぞくや友達や親類の雨をさそつてにぎやかに降ってくる」「体の中まで雨が降ってきて」など作者独自の比喻がすてきです。最後の一行の視点の展開も鮮やかです。雨の風景が一気に浮かびあがり、詩が広がり安定します。作者の柔軟で自由な思考が光っています。

入選 「お母さんの休み」 植林 公希

効果的な技巧を考え、表現を工夫して、詩のレベルを高めることも大切ですが、小中学生の場合にはそれよりもっと大切なことがあります。「よく見て書く」「感じたこと考えたことを素直に書く」ことです。そこに自ずから詩が立ち上が

つてきます。この詩は、そのみごとな例です。作者は鏡のように、お母さんの言葉や振る舞いを心に写しとり、飾ることなく言葉にしています。怒ったり、優しかったり、怒鳴ったり、矛盾したことだらけ。しかしそこに現実に生きている母の姿がリアルに浮かび上がります。根底にはお母さんへの深い信頼があるので、温かい作者の心が伝わってきます。

入選 「親友」 金築 公平

親友の「陸」のことを、感情を交えずに淡々と書いています。詩らしく書こう、という意識はほとんど見えません。しかし、心を許せる親友の姿と作者の信頼の深さが心にじんわりと伝わってきます。それはこの素朴な詩に嘘がないからです。「ゲーム機をカンタンに貸してくれたら」、「ゲームでズルをしません」と事実をそのまま淡々と書いていますが、それは当たり前のようで、当たり前ではないのです。「いじめ」が減らない社会的背景が、この詩の背後にあります。作者はそんなことは微塵も意識していませんが、子どもたちの素直な詩はそれを写し取ることが多いのです。

入選 「ぼくの弟」 佐藤 翔真

弟に対する率直な気持ちがかかれていて、思わず、「そうだよな」「そうなんだよ」と相づちを打ちながら一気に読んでしまいます。年が近いと兄弟げんかは付きものです。弟が悪くてけんかしても、必ず兄の方が「兄さんのくせに！我慢しなさい」と叱責が飛んできます。「おこられていると／ぼくをちようはつするように／弟はにやにやしながらへんなふうにおどる／おかしくて笑うと／「何で笑う」とお母さんに本気でたたかれる」ただ事実を書いただけで、鋭い批判や風刺、ユーモアなど豊かな詩の世界が立ち上がってきます。とても楽しく読みました。

ジュニアの詩を読みながら、詩を書くことには優劣を越えた意義があること、「子どもたちは無意識の詩人」だと改めて思いました。他にも取り上げたい詩がたくさんありましたが、紙幅の関係で残念です。(文責 洲浜)